

研究論文

自閉症児者の余暇活動への支援に対する家族の認識の構造

松山 郁夫*

Structure of Recognition by Families on the Activity Support for the Leisure Activity of Children and Adolescents with Autism

Ikuo MATSUYAMA

【要約】本研究では自閉症児者への余暇支援に対する家族の認識について検討した。自閉症児者を有する家族191名に、自閉症児者への余暇支援に対する認識を問う質問紙調査を実施した。家族は余暇支援に対して、「興味・関心の尊重」、「活動内容の質の向上」、「活動する環境の拡大」、「対人交流の充実」の4視点から捉え、この順に関心を向けていると示唆された。余暇支援の充実を図るソーシャルサポートネットワークの形成が必要と考察した。

【キーワード】自閉症、自閉症児者を有する家族、余暇支援、ソーシャルサポートネットワーク

I. はじめに

自閉症スペクトラム障害は「社会性の障害」「コミュニケーションの障害」「想像力の障害」の三つ組によって特徴づけられる(Wing, 1996)¹⁾。社会性の障害については、すべての自閉症スペクトラム障害の特徴であり、社会的相互交流に関心がなく、他者に対してあまり興味を示さない。他者からの働きかけを拒絶したり一人になろうとしたりしているようにも見える(Wing, 2007)²⁾。また、対人関係において、相手の心的状態を理解する機能・能力に問題がある(Leslie, & Frith, 1988)³⁾と指摘されている。現在、自閉症はDSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition)において、自閉スペクトラム症(自閉症スペクトラム障害)(ASD:Autism Spectrum Disorder)として定義されている(American Psychiatric Association 2013)⁴⁾。

自閉症があると、要求を言葉で表現できても視線が合わない、適切な身振り動作を伴わない、覚えた言葉を日常生活の中に応用して使うことが難しい、抽象的な概念や事物の関連性を理解したり使ったりすることが難しい、言葉や文章が言えても意味のある会話を作ることができない、および一方的な話題になってしまう等、コミュニケーションスキルの困難さがある(Richman, 2001)⁵⁾。青年期・成人期になっても他者との円滑なコミュニケーションをとることができないため、常時、社会適応上の問題を持っている。さらに、こだわり等周囲に理解できない行動があり、その状態像を捉えることへの困難さもあって、自閉症に対する周囲の理解が進まない(松山・内田 2007)⁶⁾。

自閉症の社会的障害は、通常の一般的な学習の源泉や、他の人びとから得ることができる情緒面のサポートから遮断されるため、他の問題に比べるとはるかに深刻である(Wing, 1997)⁷⁾。それ故、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させることが不可欠である(松山 2009)⁸⁾。自閉症は共感性が希薄なため、他者とコミュニケーションをと

*佐賀大学大学院学校教育学研究科

るのに困難さがある。したがって、援助が困難な自閉症児者への関わりを円滑に進めるためには、自閉症の心理的世界内の事象（空想）を理解しながら、この心理的世界と現実との交流をいかに図ることができるのかを考える必要があり、援助者の関わりの内容を整備していくという受容的交流を重視する必要がある（石井 2006）⁹⁾。また、自閉症者の対人意識や集団意識を醸成するために、その余暇活動を支援することが求められる（松山 2012）¹⁰⁾。

これらのことから、自閉症児者に対して余暇活動を支援するには、その障害特性や行動特徴を踏まえ、障害を軽減するように働きかける必要がある（Smith, & Philippen, 1999）¹¹⁾。特に、対人交流の中で社会性を高めていく取り組みが不可欠であろう。

余暇への指導は学校教育の中だけで完結するものではない。その実施に際しては、保護者の意向を十分にくみ、保護者と共通理解をもって指導にあたることが肝要である（関戸 1998）¹²⁾と指摘されている。したがって、福祉施設や学校等生活の場において自閉症児者の余暇活動を支援する際には、その家族との共通認識のもとで進めるべきであろう。

以上より、自閉症児者への学校や福祉施設等生活の場における余暇活動への支援を充実させていくことが求められる。しかしながら、自閉症児者を有する家族が余暇活動への支援について、どのように認識しているのかを明らかにした研究がなされていない。このため、本研究では、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対する家族の認識について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、自閉症児者を有する家族を対象として、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。

調査対象は、日本自閉症協会に加盟している都道府県・政令指定都市自閉症協会に所属している自閉症児者の家族とした。合計 198 名からの質問紙調査票が回収された。そのうち、プロフィールに関する性別・年齢、自閉症のある家族の年齢・性別の欄にすべて記入がなされてあった 191 名の質問紙調査票を有効回答とし（有効回答数を総回収数で除して算出した有効回答率については 96.5%）、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別・年齢、自閉症のある家族の年齢・性別・所属を付記した。

分析対象者のプロフィールは、男性 22 名（11.4%）、女性 169 名（87.6%）、年齢は 34 歳から 78 歳で、平均年齢 52.5 歳（SD 8.7）であった。その家族である自閉症児者は、男性 163 名（84.5%）、女性 30 名（15.5%）、年齢は 5 歳から 53 歳で、平均 22.2 歳（SD 9.5）であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成 26 年 9 月 1 日から 10 月 30 日までの 2 か月間とした。

調査方法は、日本自閉症協会に加盟している各都道府県・政令指定都市自閉症協会 53 か所に、無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。各協会に質問紙調査票 10 通を同封した。27 か所（送付した協会の 50.9%）から回答が得られた。

倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した協会に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、

すべて数値化するため協会名は一切出ないこと、および回答への記入は無記名で行うことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 調査項目の作成手順

自閉症児者を有する家族 10 名に、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して気になっていることを尋ね、得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、質問項目を作成してみたが 11 項目しかできなかった。このことは、自閉症児者を有する家族は福祉施設や学校等で具体的に余暇支援をしている様子を見る機会があっても、支援する体験をしていないためと考えた。そこで、質問紙調査票に使用する質問項目については、障害者支援施設における自閉症者の余暇支援に関する研究で作成したもの（松山，2012）¹³⁾を使用することとした。

その質問項目の作成に際しては、自閉症児者の生活支援を行っている障害者支援施設の生活支援員 5 人に、自閉症児者の余暇を支援するときに意識していることを尋ね、得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、42 項目の質問項目を作成した。その際の作成例として、「余暇をゆっくりと過ごせるようにしてほしい」と「余暇を穏やかな気持ちで過ごすようにしてほしい」を「1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「余暇活動を続けて支援してもらいたい」「余暇活動を継続してほしい」を「2. 余暇活動を継続的に行うこと」とした。なお、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援は、各ケースの状態に応じてきめ細かく行われることが不可欠である。そこで、回答に含まれている意味内容をなるべく細分化しながら質問項目の作成を行った。

自閉症児者への福祉施設や学校等における余暇支援に対して意識する度合いを問う独自の 42 項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」(1点)、「あまり気にしていない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度気にしている」(4点)、「かなり気にしている」(5点)までの 5 段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた 1~5 までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。加えて、各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

Ⅲ. 結果

自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して意識する度合いを問う独自の 42 項目の質問項目に関して、各項目の平均値・標準偏差については表 1 の通りであった。平均値の最小値は 2.62（「18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること」）で、最大値は 4.41（「26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること」）であった。全 42 項目中、32 項目が 3 点台（76.2%）、

10項目 (23.8%) が4点台であった。

これら42項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.92であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた (近似カイ2乗値 5416.104 $p < .01$)。このため、42項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら42項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は16.15, 3.61, 2.11, 1.70, 1.42, 1.16, 1.14, ……というものであり、スクリープロットの結果からも4因子構造が妥当であると考えられた。そこで、4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を除外して、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンは表2の通りであった。回転前の4因子で37項目の全分散を説明する割合は 57.85%であった。なお、これら 項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.92であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた (近似カイ2乗値 4700.83 $p < .01$)。

各因子のCronbachの α 係数を算出したところ、第1因子0.93, 第2因子0.91, 第3因子0.84, 第4因子0.87, 全項目0.95との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「41. 余暇の過ごし方に関する個別支援プログラムを作成すること」、「32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること」、「39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと」、「40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること」、「8. 余暇活動を支援するプログラムを作ること」、「31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること」、「33. 余暇活動の種類を増やすこと」、「34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること」など、主として、地域社会において各自閉症児者に応じた余暇活動の内容や場所を拡大させていくことを内容としていたため、第1因子は「活動する環境の拡大」と名づけた。

第2因子は、「22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること」、「23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと」、「15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと」、「36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること」など、主として、各自閉症児者の興味・関心を尊重した余暇活動を行うことを内容としていたため、第2因子は「興味・関心の尊重」と名づけた。

第3因子は、「2. 余暇活動を継続的に行うこと」、「4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと」、「3. 文化的な余暇活動を行うこと」、「1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「7. 余暇活動を計画的に行うこと」など、主として、各自閉症児者に応じた質の高い余暇活動を行うことを内容としていたため、第3因子は「活動内容の質の向上」と名づけた。

第4因子は、「11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること」、「5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと」、「28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること」など、主として、各自閉症児者が余暇において集団活動等を楽しんだり対人交流をしたりすることを内容としていたため、第4因子は「対人交流の充実」と名づけた。

因子別の平均値は、第1因子3.63 (SD 0.63), 第2因子4.07 (SD 0.67), 第3因子3.96 (SD 0.63), 第4因子3.24 (SD 0.80) であった。各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、4因子の平均値間には有意差が認められた。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、各因子間すべてに有意差が認められた。

このため、各自閉症児者を有する家族は、各自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対して、第2因子「興味・関心の尊重」、第3因子「活動内容の質の向上」、第1因子「活動する環境

の拡大」, 第4因子「対人交流の充実」の順に関心を向けていることが示唆された(表4)。

表1 自閉症児者への余暇支援に対して意識する度合いについての平均値・標準偏差

質問項目	平均	標準偏差
1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること	4.36	.732
2. 余暇活動を継続的に行うこと	4.14	.803
3. 文化的な余暇活動を行うこと	3.54	.950
4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと	4.03	.873
5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと	3.46	1.050
6. 余暇を過ごす技能を獲得すること	3.59	1.047
7. 余暇活動を計画的に行うこと	3.74	.915
8. 余暇活動を支援するプログラムをすること	3.51	.967
9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと	4.01	.932
10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること	3.60	.934
11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること	3.36	.984
12. 余暇の過ごし方の技能を高めること	3.37	1.001
13. 4~5人程度の小グループによる余暇活動を取り入れること	3.13	1.015
14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること	3.99	.864
15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと	3.87	.897
16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること	4.28	.784
17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと	3.39	.972
18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること	2.62	.967
19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること	3.35	.933
20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること	3.55	.916
21. 利用者がさまざまな余暇活動を経験できるようにすること	3.93	.815
22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること	4.09	.813
23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと	3.97	.870
24. 余暇活動の場所を確保すること	3.95	.916
25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと	4.19	.807
26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること	4.41	.785
27. 年齢に合わせた余暇活動を行うこと	3.88	.887
28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること	3.64	.928
29. 余暇活動にボランティアを活用すること	3.59	.859
30. 余暇活動の内容が理解できるようにすること	3.82	.858
31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること	3.36	.929
32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること	3.79	.795
33. 余暇活動の種類を増やすこと	3.65	.905
34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること	3.74	.913
35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること	3.58	1.027
36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること	3.95	.896

37. 余暇活動について利用者が楽しかったかどうかを表現すること	3.63	.895
38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること	4.23	.753
39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと	3.81	.894
40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること	3.96	.925
41. 余暇の過ごし方に関する個別支援プログラムを作成すること	3.67	.974
42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること	4.18	.808

n=191

表 2. 自閉症児者への余暇支援に対して意識する度合いについての因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
第 1 因子「活動する環境の拡大」				
41. 余暇の過ごし方に関する個別支援プログラムを作成すること	.888	-.074	-.025	-.194
32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること	.756	.008	-.008	-.019
39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと	.709	.063	.020	-.077
40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること	.678	.056	-.001	-.076
8. 余暇活動を支援するプログラムを作る	.667	-.052	.152	-.003
31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をする	.646	-.087	-.039	.266
33. 余暇活動の種類を増やすこと	.637	.036	.108	-.044
34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること	.565	.276	.000	-.035
35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること	.561	.135	-.031	.018
29. 余暇活動にボランティアを活用すること	.552	-.080	-.117	.227
30. 余暇活動の内容が理解できるようにすること	.523	.139	.003	.112
12. 余暇の過ごし方の技能を高めること	.476	-.053	.189	.186
9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと	.470	.169	.248	-.092
19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をする	.447	.120	-.078	.268
17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと	.442	.093	-.164	.250
10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること	.427	.282	.024	.125
20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること	.410	.191	.117	-.059
第 2 因子「興味・関心の尊重」				
22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること	-.021	.949	-.088	-.003
23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと	.100	.925	-.065	.115
15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと	-.044	.800	-.024	.140
36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること	.310	.679	-.197	-.044
42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること	.286	.570	.025	-.067
25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと	.125	.489	.315	-.133
14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること	.161	.446	.182	.044
16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること	-.032	.417	.401	-.072
第 3 因子「活動内容の質の向上」				
2. 余暇活動を継続的に行うこと	-.107	.043	.804	.021
4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと	-.073	.040	.680	.114

3. 文化的な余暇活動を行うこと	-.064	-.053	.637	.177
1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること	.049	.076	.635	-.247
7. 余暇活動を計画的に行うこと	.239	-.175	.555	.149
6. 余暇を過ごす技能を獲得すること	.286	-.198	.487	.103
26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること	.090	.406	.421	-.054
第4因子「対人交流の充実」				
11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること	-.099	.202	.047	.824
5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと	-.262	-.082	.315	.782
28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること	-.040	.269	-.059	.730
18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること	.178	-.133	-.139	.676
13. 4~5人程度の小グループによる余暇活動を取り入れること	.254	-.116	.075	.662

n=191

表3 自閉症児者への余暇支援に対して意識する度合いについての分散分析の結果

区分	平方和	自由度	平均平方	F値
余暇支援	78.757	3	26.252	106.455*
被調査者	216.949	190		
誤差	140.565	570	.247	
全体	436.271	763		

*p<.05

表4 自閉症児者への余暇支援に対して意識する度合いについての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「興味・関心の尊重」	第3因子「活動内容の質の向上」	第4因子「対人交流の充実」
第1因子「活動する環境の拡大」	.434*	.325*	.390*
第2因子「興味・関心の尊重」		.109*	.824*
第3因子「活動内容の質の向上」			.715*

*p<.05

IV. 考 察

自閉症児者を有する家族は、地域における積極的かつ柔軟な支援を必要としている。各家族に応じたフォーマルとインフォーマルのネットワークによる支援が求められる (Hecimovic, Powel, Christensen, 1999)¹⁴⁾。さらに、自閉症児者に対する生活の場における余暇活動への支援を充実させていくためには、活動できるソーシャルサポートネットワークが存在していることが不可欠となる。

一例として、ソーシャルサポートネットワークが形成されている環境で実践された動物介在療法の一つであるイルカ介在療法に関して、木谷ら(2004)は、「イルカが必ずしも必要なのではなく、自閉症児にとって安心できる時間と空間において、彼ら/彼女らが自らの関心を自発的に示すことができるようなプログラムの流れを、将来に向けての視点を取り入れながら、個々の状態に応じて設定していくことが効果的だと考えられる」¹⁵⁾と述べている。

このように、自閉症児者が安心して余暇を自発的に楽しむことができる環境を広げていく必要がある。第1因子「活動する環境の拡大」は、家族が地域に余暇活動の場が広がっていくように望んでい

ることを表していると考えられる。余暇活動の場を広げていく際、自閉症児者が楽しめる活動をするためには、各々の興味や関心に応じた余暇活動に取り組むことができるような支援を展開していく必要がある。

自閉症児者を有する保護者は子供が安心して楽しく過ごせる場を求めており、そこが子供自身の興味・関心に応えたり、その特性を踏まえた活動になったりすることが求められている(高橋・石倉 2004)¹⁶⁾。したがって、自閉症児者に対して、選択する機会を設けたり興味のあるものを呈示したりすることによって、適応行動を増やし、社会性を高めていく支援が不可欠となる。第2因子「興味・関心の尊重」は、家族が自閉症児者の興味や関心に基づいた支援をするような配慮を求めていることを表しているのであろう。

遊びは、楽しさや満足など肯定的な情動が経験され、それが共有されやすいコミュニケーションの場面とされている(鯨岡 1998)¹⁷⁾。余暇指導については、学校教育の中だけで完結するものではなく、保護者の意向や生徒本人の希望も十分に取り入れながら、適切なアセスメントのもとに、個別に計画・実践・評価されていく必要がある(関戸 1998)¹⁸⁾と指摘されている。このようなことから、余暇活動に関しては、楽しさや他者とのコミュニケーションが成立するように図り、その内容が個々に応じたものであることが求められる。そのため、第3因子「活動内容の質の向上」は、家族が余暇活動をよりよいものにしていきたいとの希望があることを表していると推察される。

自閉症児者は人間関係に関する障害を持っているため、社会適応において困難さがあるという障害特性を踏まえた上で支援しなければならない(Richman, 2001)¹⁹⁾。自閉症児者は、社会的交流、社会的コミュニケーション、思考や行動の硬さに関する障害を示す。コミュニケーションをとることの脆弱さは、その障害の基本的問題である(Glazzard, Stokoe, Hughes, 2015)²⁰⁾。また、表情、意図を示す身振りや姿勢を理解することが難しい(Jordan, Powell, 1995)²¹⁾。これらの障害を軽減し、発達を促進させるためには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていくことを重視する必要がある(松山 2009)²²⁾。このようなことから、第4因子「対人交流の充実」は、家族が自閉症児者の対人交流を促し、社会適応を促す支援が不可欠と捉えていることを表していると窺える。

自閉症児者に対して、「その意思を尊重したうえで選択機会の設定、待つ対応、興味のある活動の呈示などをすることが問題行動を減らし、QOLを向上させるうえで重要であった」と示されている(岡本 2009)²³⁾。個々の自閉症児者の興味や関心を尊重することで余暇活動に取り組めるようになり、活動内容の質の向上につながり、生活支援員や入所している自閉症者との交流を促す場面が増えると考えられる。また、このような支援は、自閉症における対人関係障害等の社会的障害の改善を図ることになる(松山 2012)²⁴⁾。さらに、個々の興味や関心を尊重しながら余暇活動をする環境を広げていくことで、対人交流を促す支援も容易になる。そのため、自閉症児者を有する家族は、「興味・関心の尊重」、「活動内容の質の向上」、「活動する環境の拡大」、「対人交流の充実」の順に関心を向けているものと判断される。

これらの視点から、個人の成長・発達と社会生活における配慮がある余暇支援がなされるためには、家族、友人、近隣、ボランティア等によるインフォーマルサポートと、公的機関や専門職によるフォーマルサポートに基づく援助関係を含めたソーシャルサポートネットワークを形成することが求められる。しかしながら、自閉症児者の余暇活動を支援する際、地域の社会資源を活用した支援が十分に機能していないという問題があり、この点の改善を目指すためには、障害者支援施設の人員配置の改善、自閉症児者に対する余暇活動を充実させるための地域のネットワークの形成等、国や地域社会における政策レベルの対応が不可欠になってくる(松山 2012)²⁵⁾。

総じて、地域における自閉症児者への余暇支援の充実を図る取り組みがなされるソーシャルサポートネットワークを形成することが求められる。今後、地域における自閉症児者の余暇活動を支援するソーシャルサポートネットワークのあり方を明らかにする必要がある。

V. 結 論

自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇支援に対する家族の認識について検討するために、独自に作成した質問紙調査票を用いて調査を行った。その結果、自閉症児者を有する家族は、自閉症児者への福祉施設や学校等生活の場における余暇活動に対する支援を「活動内容の質の向上」、「興味・関心の尊重」、「活動する環境の拡大」、「対人交流の充実」の4つの視点から捉え、この順に関心を向けていると示唆された。これらを踏まえて、地域における自閉症児者への余暇活動に対する支援の充実を図るソーシャルサポートネットワークを形成することが不可欠と考察された。

引用文献

- 1)Wing, L., (1996) The Autistic Spectrum: a guide for parents and professionals. London: Constable.
- 2)Wing, L. (2007) Children with autistic spectrum disorders.' In R. Cigman (ed.), Included or Excluded: The Challenge of Mainstream for Some SEN Children, London: Routledge. 23-33.
- 3)Leslie, A. M., & Frith, U. (1988). Autistic children's understanding of seeing, knowing and believing. British Journal of Developmental Psychology, 6, 315-324.
- 4)American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5. American Psychiatric Pub.
- 5)Richman, S. (2001): Raising a child with autism. : A guide to applied behavior analysis for parents. London: Jessica Kingsley Publishers.
- 6)松山郁夫・内田博昭 (2007) 自閉症のライフステージにおける療育に対する直接処遇職員の捉え方. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 12(1), 205-214.
- 7)Wing, L. (Ellis, K. 編) (1997) 自閉症 (久保絃章・井上哲雄監訳) ルーガル社
- 8)松山郁夫 (2009) 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 14(1), 309-316.
- 9)石井哲夫 (2006) これからの障害者支援—自閉症の人への支援を實踐して得たもの. 教育と医学, 54, (12), 1092-1100.
- 10)松山郁夫 (2012) 障害者支援施設における自閉症者への余暇支援のあり方—生活支援員に対する意識調査を通して—. 福祉研究, (104), 58-65.
- 11)Marcia, D. Smith. Leslie, R. Philippen. (1999) Community Integration and Supported Employment Berkell, Z. Autism: Identification, Education, and Treatment Second Edition LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES 301-321.
- 12)関戸英紀 (1998) 中学校特殊学級における知的障害児に対する余暇指導—教師の意向と保護者の要望との比較を通して—. 横浜国立大学教育人間科学部紀要, I, 教育科学, 1, 35-48.
- 13)松山郁夫 (2012) 障害者支援施設における自閉症者への余暇支援のあり方—生活支援員に対する意識調査を通して—. 福祉研究, (104), 58-65.
- 14)Anton, Hecimovic. Thomas, H. Powel. Linda, Christensen. (1999) Supporting Families in Meeting

Their Needs Berkell, Z. Autism: Identification, Education, and Treatment Second Edition
LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES 261-299.

- 15) 木谷秀勝, 石村真理子, 宮崎佳代子, 坪崎仁美 (2004) 自閉症児とイルカ介在療法—地域支援の視点からの分析—. (学校教育臨床研究) 教育実践総合センター研究紀要, 17, 183-190.
- 16) 高橋信幸, 石倉健二 (2004) 自閉症児を対象とした集団活動の意義についての検討—臨床心理学的地域援助の視点から—. 長崎国際大学論叢, 4, 233-241.
- 17) 鯨岡 峻 (1998). 秦野悦子・やまだようこ (編) コミュニケーションという謎. ミネルヴァ書房, 173-200.
- 18) 同上 12)
- 19) 同上 5)
- 20) Jonathan, Glazzard. Jane, Stokoe. Alison, Hughes. (2015) Teaching and Supporting Children with Special Educational Needs and Disabilities in Primary Schools Second Edition Annette Netherwood Learning Matters
- 21) Rita, Jordan. Stuart, Powell. (1995) Understanding and Teaching Children with Autism. John Wiley & Sons
- 22) 松山郁夫 (2009) 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 14(1), 309-316.
- 23) 岡本邦広 (2009) 学校生活への参加が苦手な知的障害を伴う自閉症児の意思を尊重した支援. 特殊教育学研究, 47(2), 129-138.
- 24) 松山郁夫 (2012) 障害者支援施設における自閉症者に対する余暇支援の有効性—生活支援員に対する質問紙調査を通して—. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 16(2), 123-132.
- 25) 同上 24)

謝 辞

調査に際し、日本自閉症協会に所属されている皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。

(2017年2月10日 受理)